

〈解答〉

- ① 1 並立（の関係）
2 少年の鮓を
3 〔例〕 美味な食物は、年齢を重ね、社会人として生活環境を拡大することで見いだしていくものだ（という考え。）（41字）
4 工
5 〔例〕 食物をおいしいと思うことがまれな（16字）

配点 各2点 10点満点

〈解説〉

- ①
1 波線「息子や娘にも」という文節内の言葉を、「娘や息子にも」と入れ換えても、波線を含む文の意味は変わらない。これは、「息子」「娘」という二つの言葉が、同じ言葉を修飾しているためである。このように、同じ働きをする言葉が並ぶ文節の関係を、「並立の関係」という。
- 2 波線①の十六〜十七行後に「少年の鮓をつまむ巧みな手つきは、うす気味悪くさえあった」とあるのに注目する。「うす気味悪い」は「なんとなく不気味なさま」を表しており、なれた手つきで鮓をつまむ少年に対する作者の「違和感」が表現されている。なお、傍線①の直後にある「不幸な少年だと思った」という一文は、なれた手つきで鮓をつまむ少年に対して作者が抱いた印象や感想ではあるが、違和感を表現しているとはいえない。
- 3 傍線②の直前にある「人間が生きてゆく喜びの一つに、美味な食物との出会いがある。それは年齢にしたがって、また社会人としての生活環境の拡大によって見いだしてゆくもの」という部分をまとめる。筆者は、美味な食物は、年齢を重ねて、社会人となり、生活環境が拡大するにつれて見いだしてゆくものだという考えをもっており、そうした過程を経ないまま、少年が美味な鮓を食べているため「早くも」と述べ、疑問を抱いているのである。
- 4 「糸目をつけず（糸目をつけない）」は、「物事をするのに何の制限も加えない」という意味の慣用表現で、多くの場合、「惜しげもなく金品を使うこと」という意味で使われる。
- 5 傍線④の直後の段落の最後の一文に「それ故に私は不幸な人たちでもあると言うのである」とあるので、その直前にある「おいしいと思うことはまれ」という部分が、食通の人たちを不幸であると、筆者が考える理由であるとわかる。ただし、「おいしいと思うことはまれ」だけでは言葉足らずで、字数も不足するため、何をおいしいと思うことがまれなのかを明確に示す必要がある。